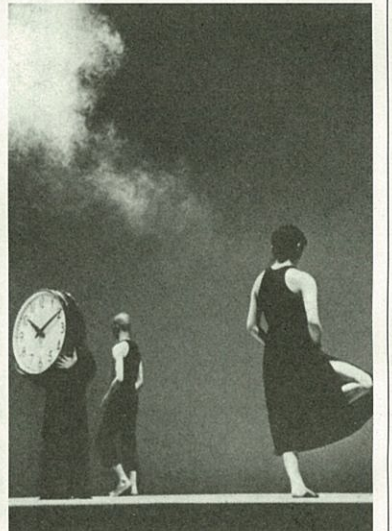


万有引力

14

編集●J・A・シーザー
発行●寺原孝明
A・D●小林桂太
発行日●13年12月12日

贍客第



THE UNIVERSITY OF CHICAGO PRESS

寺山修司没後30年・万有引力30周年によせて

1983年・寺山修司が逝去し天井桟敷が解散、シーザーが中心となって万有引力を結成。それから30年…。この道程は劇団のみの力で成し得たものではない。内外でご助力いただいた方々の言葉たちを、ここに紹介！

「奴婢訓に初めて参加した時、摩訶不思議なこの世界観に容れられ、引き込まれた。笑、そんな感覚があります。でも気がついたらこの世界の虜になっている自分を発見…。歌っている私を照らすあのマツの、瞬時に燃え上がり、消え、又燃える姿はまるで人生そのものの様であり、そんなに肩に力を入れて生きなくてもいいんだ」と言われている気がしたものです。強烈で複雑な世界に、何とも優しく美しい…。この寺山ワールドを引き継ぎ、確実に育て続けている万有引力の、そしてJ・A・シーザーの私はファンであり、応援隊の一人であることを宣言します!! 祝30周年!!

旺なつき「女優」

「万有引力」の演劇零年

創立30周年を迎える演劇実験室●万有引力は、演劇実験室●天井桟敷の正統な後継者である。それは寺山修司の共同演出者として、音楽を担当していたJ・A・シーザーが、寺山の血脈を継いでいるからにはならない。もともと伝統演劇でない限り、単なる踏襲ではなく、万有引力独自の色彩を施していくのは当然である。創立30周年を節目として、劇団の作品をどのような色に染め上げていくのか、私たち観客の興味は尽きない。

北川登園「演劇評論家」

設立30周年おめでとう！演劇実験室●天井桟敷の活動は16年間続いた。だが演劇実験室●万有引力はその倍の年月を活躍してきたことに對し、唯だ喜びにたえません。寺山の片腕としてアシストしてきたJ・A・シーザーを中心に「天井桟敷」が提示してきた演劇理念を維持してきたことに改めて敬意を表します。我々が作ってきた演劇の根底には、今に通用するテーマが内包されているので、演劇を志す若き世代に受け入れられているのだと思います。どうか演劇実験室●万有引力が寺山の意志を率先して受け継いで、次の世代に伝えていくことを願います。

九條今日子「演劇プロデューサー・元天井桟敷」

何故か真の暗闇の中を素早く動ける。なんだかとても身体を張っている。なんとなく黒と白が隣り合わせ。パツと見透し。でも共に過こした皆は、ちよびりシヤイな優しい人達でした。寺山さんと万有引力に、乾杯。

久世星佳「女優」

寺山ワールドとシーザーサウンドに初めて魅了されたのは高校時代に観た映画「田園に死す」だった。その後、演劇の世界に足を踏み入れた私は、暗海の国際貿易センターで上演された天井桟敷の「奴婢訓」初演を手伝い、寺山さんとシーザーと交流を持てるようになった。この出会いが私の人生の大きな節目となった。それから35年。万有引力との交流は、次の世代息子にも引き継がれ、これからも続いていくことだろう。30周年、おめでとう！

小松杏里「劇作・演出家」

「昭和はどこだ？昭和、前に出ろ！昭和は何故今日、山本のリンチの時を掛けると命令しないで自分の指揮棒で殴った、その意図を俺と出ている40人に説明しろ！」はあ、意図はありますか？ただ山本に毎日バケツで何杯も何杯も水を掛けて馬鹿見たいに拍手貰つても役者は進歩がないと思ひ変えてみたのですが、「そうか！昭和が自分勝手な俺の演出を愛するな！明日から、この芝居全部を変えて演出してみろ！」あとの30分におよぶ説教は書ききれない。「寺山さんが倉庫の所で呼んでいます」「まだかよ！つうすつと状況劇場が脳裏に浮かんだ。「昭和、さきほの前の前を呼ばかして悪かった。自分勝手な演出は芝居が成り立たないんだ。今日はこれで飲んで帰れ。開機シャツのポケットに紙幣であるはずの物を入れた。早く見たくて地下鉄のトイレに入ってしまったら三万あった。あの位皆の前で怒られて三万円か悪くないな、明日もう一回だけ水攻めの命令を出さないで指揮棒で叩いて見ようか。」

昭和精舎「俳優・元天井桟敷」

万有引力の数々の作品は、シーザーが若し時、美術をめぐっていたらあつて、アートで劇的だ。耳の聞こえない演者と組んだ作品が印象に残ります。青森や松山の市街劇など、月蝕劇団がともに演じたことも楽ししい思い出です。三十周年おめでとうございませう。

高取英「月蝕劇団代表」

劇団結成30周年おめでとうございませう。時間がたつのは早いですが、私が18歳の時に、寺山修司先生や天井桟敷の劇団員の皆様にお世話になっていたんですから、自分の年齢を考えると…。ですね。当時、寺山先生や劇団員の皆様から何の訓練も知識もない私に指導頂いたこと、今こうして仕事を私が続けられているのも、そのお蔭様だと思っております。

これからは「演劇実験室●万有引力」さんで寺山先生の作品を山上演されるのを楽しみにしております。

高橋ひとみ「女優」

マツの炎の揺らぎ。明滅のリズム。満ちてくる硫黄の匂い。蓄光テープもないのに、どうしてあんなに動けるんですか？ミラクル。いつかの舞台に拍手！素晴らしい！素晴らしい！素晴らしい！言葉になりません。動と静。光と影。喧嘩と静寂。それらが一時に泉のように湧き出して、研ぎ澄まされた感覚と表現に最後まで釘付けでした。観終わった後は、光が全部白くして、白い明かりが辺りを照らしているような突き抜けた爽快感がありました。今の憂鬱な空気を吹き飛ばす力が芝居にあると確信します。有難うございました。

竹下景子「女優」

「初めて寺山修司の名前を知ったのは、今から45年程前の高校3年の時に友人に借りた「現代詩手帖」でした。…血は止つたまま眠っている。この行にやられました。その後、中井英夫氏の勧めで初めての個展のDMに跋文を頂きました。一年の中で一番素敵な季節は、われに五月を、五月しかありません。『座右の銘は？』と訊ねられれば、創造力程高く飛べる鳥はいないと思えます。」

建石修志「画家・美術家」

万有引力創立30周年おめでとうございませう。寺山ワールドを受け継ぐ、シーザーと劇団の方々の創り出すイメージの世界。毒と華と危険と美しさ、そしてエンターテインメント満載の世界に、初めて舞台をこころざせていただいた時の、とても素晴らしい体験を今でも鮮明に覚えています。これからも、この魅力的なイメージの世界はますます息づいていくことと思ひます。

そんな万有引力のこれまでと、これからに拍手喝采です！

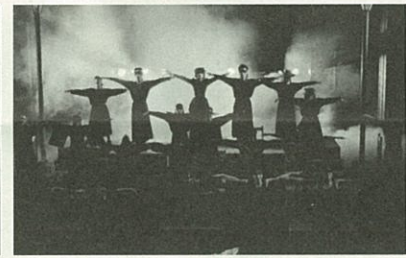
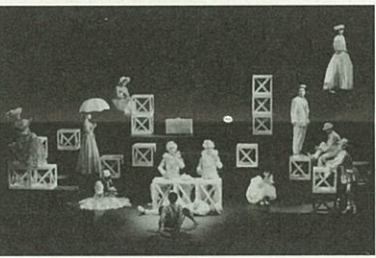
館形比呂「俳優・ダンサー」

30周年おめでとうございませう。求める世界があり、それを追いつける…。ものすごいことだと思ひます。今、芝居と言っても様々なものがたくさんあります。その中で、確固たる信念を持って、力強く刺激的な舞台を創り続けている万有引力。素晴らしいです！演劇の底力を感じます！これからも、体の芯に響く強烈な作品を楽しみにしています！

剣幸「女優」

寺山さんの事…

1971年「はみだし劇場」を旗揚げしてアングラの世界に殴り込みをかけた当時、時のアングラ小劇団の強者を集めて特集した雑誌「地下演劇」の座談会に寺山修司さんもオファーとして参加していらした頃が懐かし思い出される。常に我々の先を走り続ける時代の先駆者だった。その芝居は今も色褪せる事なく今を撃つ！そしてシーザーの音楽も。はみだし劇場の最後の芝



奴婢訓

2012年6月12日～19日 ●シアターラム

猥雑と混沌の中に原石を見出だすように、観客は魅惑され、陶酔感に襲われる。肉体の緊張と人間同士の均衡と不均衡。この禍々しい夢物語は未だに色褪せることはない。最早ワールドスタンダードの域に達している!!

狂言師・世田谷パブリックシアター芸術監督 野村萬斎

野村萬斎



「奴婢訓」は時代を映す鏡だ。初演から様々な評価を得てきたが、それらはいずれも時代と共にあった。これまでこの物語は「我々を取り巻く世界、あるいは、この国の風刺劇だ」と言われ続けてきたと思う。私もそう考えていた。奴婢の王さまゲームは、この国で暮らす人々のことだと感じていた。しかし、そこに私の役は特になく、「奴婢訓の世界」を俯瞰してシニカルに解釈して楽しんでいた。だが、それから35年を経たに広がっていったのではないだろうか。同時にギョウリで開催したわたしの演劇ノート展は、シーザーの演出するイメージの押し込められた「阿呆船」であることを知るのだった。この広大な日常の空間から、たちまちにして阿呆船の船底を創り出すシーザー原文のままの「力」を何と名付けたらよいのか戸惑った制作に関わった若者は突如としてパラダイムシフトと感嘆するばかりである。「阿呆船」は狂気と理性、王権とトリックスターなど文化の中のキーワードが「両義性」の時代の作品である。天動説と地動説の両義を超えて人道説を提案した。人が動き、動かすことで何が生まれるということである。この5ヶ月後に立ち現れる日本をのみ込む危機感に、この提案は無言のうち産業革命以降の西洋の都市文明の繁栄の陰に生まれた、いわば鬼の子なのだ。

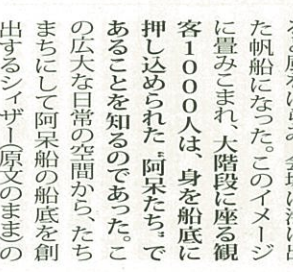
今、シアターラムの上演は私に別のインパクトを与えた。『奴婢訓』は風刺ではなかった。ふとネットを検索してみると。そこは奴婢の世界が広がっている。そして、その中には「私も」いる。たぶん「あなたも」いる。これからさらに「奴婢訓」は未来に広がってゆくのだらう。「奴婢訓」は「予言」の物語だったのだ。

アニメーション作家・監督 (少女革命ウテナ他) 幾原邦彦

阿呆船

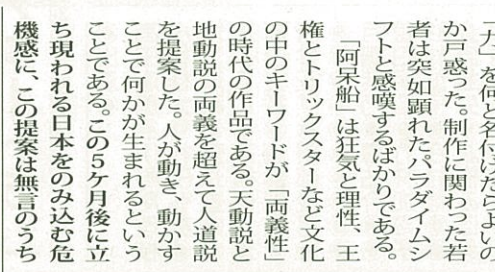
2010年10月10日～17日 ●ハルテノン多摩

80段の大階段の天辺に神殿がいの構造物(パゴダ)が据えられているのを見た。その愛称はパルテノン多摩である。が、実の名称は「多摩市立複合文化施設」建物自体は多摩中央公園の法面ののりめんに背面を埋め込まれた形で建てられており、大階段は建物の中央を駆け上り、屋上に据えられたパゴダをくぐり抜ける。とそのまま公園に繋がっている。文化によって街を活性化すべきことが設計の意図に込められた様相である。



開館10周年記念事業として1998年に「100年気球メトロポリス」を公演した。同時多発劇として6つの演劇作品(モチーフ)に20を超え、演劇イベントを散りばめて施設と公園の全域を使い祝祭的な演劇世界を出現させた。「阿呆船」は、既にこのメトロポリスのパゴダの中に組み込まれていた。大階段下のイントレとパゴダの上で手旗を振る水兵たちにより船の甲板がイメージされた。15m四

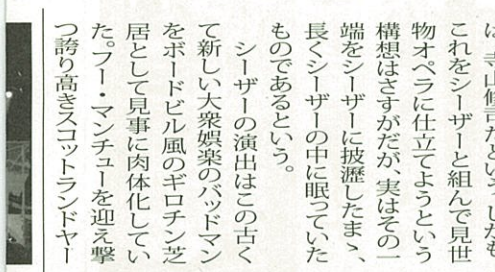
紙芝居活劇オババ 怪人フー・マンチュー 2012年7月26日～26日 ●座・高田寺



「阿呆船」は狂気と理性、王権とトリックスターなど文化の中のキーワードが「両義性」の時代の作品である。天動説と地動説の両義を超えて人道説を提案した。人が動き、動かすことで何が生まれるということである。この5ヶ月後に立ち現れる日本をのみ込む危機感に、この提案は無言のうち産業革命以降の西洋の都市文明の繁栄の陰に生まれた、いわば鬼の子なのだ。

怪人フー・マンチューの可笑が聞こえる

万有引力の「怪人フー・マンチュー」は快作だ。従来の天井桟敷の代表作の忠実な復活、再現を担った作品群とは一線を画す、いささか趣きの異なる作品として、新鮮なメッセージを内包している。それは、かつて万有引力の中期の傑作、あの『未来のイヴ』を思い出させてくれるにふさわしい確固とした手応えを観る者に与えてくれたのだ。



人類の見果てぬ夢、科学の粋このフー・マンチューもまた、たえば、わが国の大江山の酒呑童子が、律令国家が生み出した「異物」であったように、このフー・マンチューもまた、

遊行舎主宰・演出家 白石征

「奴婢訓」は時代を映す鏡だ。初演から様々な評価を得てきたが、それらはいずれも時代と共にあった。これまでこの物語は「我々を取り巻く世界、あるいは、この国の風刺劇だ」と言われ続けてきたと思う。私もそう考えていた。奴婢の王さまゲームは、この国で暮らす人々のことだと感じていた。しかし、そこに私の役は特になく、「奴婢訓の世界」を俯瞰してシニカルに解釈して楽しんでいた。だが、それから35年を経たに広がっていったのではないだろうか。同時にギョウリで開催したわたしの演劇ノート展は、シーザーの演出するイメージの押し込められた「阿呆船」であることを知るのだった。この広大な日常の空間から、たちまちにして阿呆船の船底を創り出すシーザー原文のままの「力」を何と名付けたらよいのか戸惑った制作に関わった若者は突如としてパラダイムシフトと感嘆するばかりである。「阿呆船」は狂気と理性、王権とトリックスターなど文化の中のキーワードが「両義性」の時代の作品である。天動説と地動説の両義を超えて人道説を提案した。人が動き、動かすことで何が生まれるということである。この5ヶ月後に立ち現れる日本をのみ込む危機感に、この提案は無言のうち産業革命以降の西洋の都市文明の繁栄の陰に生まれた、いわば鬼の子なのだ。

忍和謙は、寺山修司の予備校だ。サーカスのシスターは、他国を夢みるわらわらした。そしてシスターの東京巡礼歌は、寺山修司が世界の涯へ旅立つてゆく伴走曲だった。天井棧敷は、いわば大地獄めりだつたのだ。だから、寺山修司逝つて三十年、わたしは今日も、万有引力の演劇へと出かけてゆく。

白石征「遊行舎劇作・演出家」

「永遠のわかれんぼ」

寺山さんとの最初の出会い。1989年バルコ劇場公演の「青ひげの城」第の巻の役でした。どうしてこのような奇跡が起きたのか、今もよくわからない。それは信じられないほど楽しい万有引力の世界でした。リハサルと称されてた遊んでると、それが翌日には寺山さんの手で台本になつてゐるなんて、まるでシンデレラの南瓜が馬車になつたようでした。それはマジックでした。

バスの中で芝居する私に「今日は脱ぎませんか」「そろそろ脱ぎましょうよ、千秋楽まで開幕前の毎日、楽屋にそう言ひに来られた寺山さん、生のお客様の前で「裸」の勧めは、わたしはショック過ぎて現実にはなりませんでした。実現していたら私の運命も今と違つて、たかもしれません。

寺山さん亡きあと、シスターの演出で7本ほど出演させていたとき、ヨーロッパ公演にも行かせていただきました。寺山さんあなたは私たちに呪文をかけたまま、迷宮の鍵をもつて逝かれてしまつたのです。未だに私たちは鬼のいないまま、かくれんぼをつづけているのです。主のいない寺山さんの城を守りつづけているシスターに心よりありがとう。

瀬間千恵「歌手・女優」



森崎崎陸「演出家、グラフィックデザイナー・元天井棧敷」

三上宥起夫「とりふね舞踏会」主宰・元天井棧敷

●万有引力仮面図鑑●

象の口から時刻の数だけの球を吐き出す、アラビアのハルン・ラシッドがカル大帝の戴冠式に贈つたといわれる時計のように、稽古場や劇場あるいは劇場に成すすべての場で、思い思いの刻を打つ演劇実験室●万有引力の劇場師たちは、《唯にすぎぬ刻の音》を、ただ黙って聴いている。雲の隙間にあるという時代の亀裂を劇場の闇から見つめている。《その時》を待つかのように……

●J・A・シスター

●高田恵篤

●伊野尾理枝

●小林桂太

●村田弘美

●木下瑞穂

●飛永聖

●森よつこ

●高橋優太

●七生

●前田文香

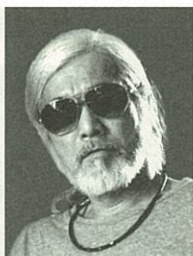
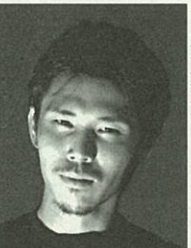
●渡部剛己

●黒田愛子

●a_kira

●鈴木智仁

●大上貴摩瑠



軽気球通信

結成30周年を迎えた演劇実験室●万有引力は、『SUNA』を今年5月に上演した。これは1986年にエジンバラでフリンジ・ファースト賞を受賞した作品で、人間関係を距離、あるいは砂の量などで計測しようと試みた。このオリジナル作品で固着の劇的方向性を掴んだ演劇実験室●万有引力は、1989年の『奴隷訓練』『リリアン』『身毒丸』でもオーディションを行う予定だ。寺山修司の遺作として『寺山修司』の上演にも取り組んできた。今年7月には、天井棧敷がユースピアやフランスで好評を博したものの、渋谷での凱旋公演では乱闘騒ぎとなつた『わくわく』の演劇『呪術音楽劇 邪宗門』を約30年ぶりに上演した。

今後の活動予定は、まず今年12月にJ・A・シスター・コンサート「大鳥の来る日」(4面記事参照)を、そして演劇の次回作は『観客席』『リリアン』だ。さらに再来年には、待望の『説教節の主題による見世物園』(翌年エジンバラ国際演劇祭でSUNAに改題し、日本人初のフリンジ・ファースト賞受賞は、社会の基本であるべき家族を中心に、距離に関わる事柄と人間との関係をテーマにした、万有引力の代表作である。そしてこの劇は、再演毎に変化し続けている問題作でもある。特に今回は、フランスの郵便配達夫フェルディナン・シヴァル(一八三六―一九二四)を捉え直す試みでもあつた。

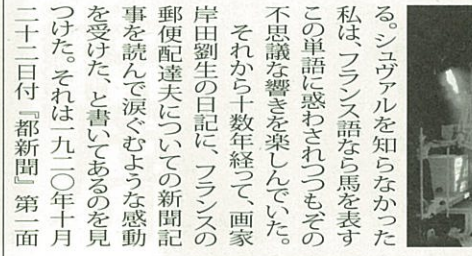
SUNA

2013年10月26日〜31日 ●笹塚ファクトリー

二人の郵便配達夫、そして「青」

一九八五年初演の『砂漠の動物園』(翌年エジンバラ国際演劇祭でSUNAに改題し、日本人初のフリンジ・ファースト賞受賞は、社会の基本であるべき家族を中心に、距離に関わる事柄と人間との関係をテーマにした、万有引力の代表作である。そしてこの劇は、再演毎に変化し続けている問題作でもある。特に今回は、フランスの郵便配達夫フェルディナン・シヴァル(一八三六―一九二四)を捉え直す試みでもあつた。

この劇の中心人物カタツムリは、郵便配達をしながら石を集めて建物を作る、しかし石を拾うごとに何かを忘れていた。シヴァルは郵便配達をしながら石を集め、その石を積み上げて巨大な理想宮を造り上げた。初演では、「郵便配達夫のシヴァルを除いては……」という台詞が私の耳に残つていて、謎の男がシヴァルの建築家に中国人と流の係に……という話した後の独り言であつた。



は、今回再び変わつて来た。これは、フランスの郵便局のマークが黄色地に青であることと無関係ではあるまい。だがそれ以上に、その青がどれほど切なく静かであつたことか。青は石を拾うたびに何かを忘れていくカタツムリと、ただ石を積み上げて自分の宮殿を造つていたシヴァルの孤独と悲しみを思つて、もう一度馬を走らせたい。シヴァルは愛人扱いされただるが、彼は純粋な人間もいなかったはずだ。彼は「砂」一粒に世界を見、同時に「輪」の野の花に天を見ていた(ウィリアム・ブレイク「無垢の占」)に違いないのである。これまで『SUNA』で舞台に並べられていた箱の、日本の郵便局の一角に詰め込まれ

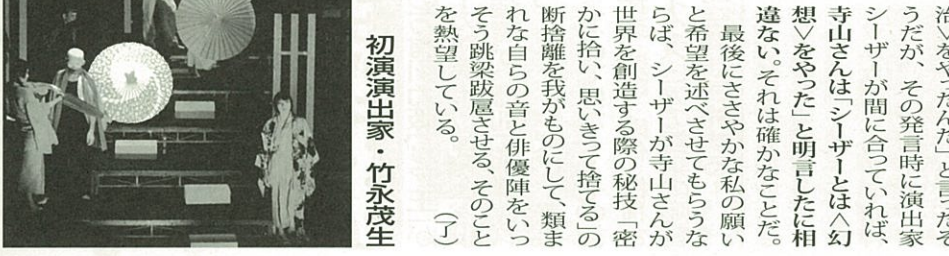
呪術音楽劇 邪宗門

2013年7月16日〜20日 ●座・高田寺

シスター版再演『邪宗門』観劇小記

実は「シスターと万有引力」の劇を観るのは今回が初である。彼は舞台がはなれた後「自分と劇団の劇を」少し小馬鹿にしてたんじゃないかと訊いたが、それはまったくもって正確ではない。

長い間遊んでいたのは、概ねつぎのような理由に根ざしていた。シスターが劇団を立ち上げたおおよそ十年ばかり前、私は広告世界へ踏み出しており、少なくとも広告世界はオババランドだから、アンダーグラウンド的なものは遠ざける必要がある、と心に決めた。そして二十五余年間、ほぼそのように過ごしてきた。(そして後年、広告世界から遠のくと、自ずとその自戒・自律の縛は緩んでいった。



初演演出家・竹永茂生

四十数年前の初演時を思い出しつつ眼前のシスター版をのり当たらせると、『邪宗門』という演題そのものからすればシスター版は実に邪宗のイメージを増幅出現させていると言えた。とりわけ良く鍛錬された役者陣の敏捷かつしなやかな動きと衣装とは初演時の寺山世界とは異なる異界の趣が強くした。

さて、通常再演といふとき、

虚構的現実主義者のUDには

寺山修司は地獄偏愛家のブレレイオスの天動説虚構主義者。J・A・シスターは極楽偏愛家の、コペルニクス的地動説現実主義者。その感性と嗜好は大きく相反する。必然、寺山派風土説話学ではなく、J・A・シスター派風土説話学を目差す。そして万有引力UDC(ユニヴァーサル・グラヴィティ・デザイン)を標榜した。しかしどうだったか。30年、宇宙の暗黒UDC(ユニヴァーサル・ダーク・ユニヴァーサル)の中に我が垣間見た物、極地的聲明UDV(ドメスティック・ヴァイス)ではなかったか。劇場の中のUDは偶然にも、限りなく地獄偏愛虚構画像を映し出すスクリーンとして有能だった。あたかも空気が感染するように寺山のDNAは受け継がれることになつた。そのプロジェクトの機軸名こそ、UGC(ユニヴァーサル・グラヴィティ・デザイン)と呼ばれた。そしてシスターの肉体フレイクと、音感ヌタルの不統一が虚構的現実主義者FRF(フレイク・リアル・フィクション)という、世にも希有な存在を許容することになる。

1971年5月、天井棧敷ヨーロッパ公演のはじめ、フランス(ナンシー市)で開催されたナンシー国際演劇祭の「市街劇・人力飛行機ソロモン」と「邪宗門」の制作上演中、連日の興奮と狂躁の中で、セントラルホテルの一室に詰め込まれ

この芝居の精進が完璧からである。

演劇実験室●万有引力
070-5461-9904